

私の主張



東京女子医大
名誉教授
大森安恵

おももり・やすえ 東京女子医大教授など歴任。日本糖尿病・妊娠学会を創設。02年から海老名総合病院・糖尿病センター長。08年米サンサム科学賞を受賞。

あまり一般に知られていないが「日本・アラブ女性交流」という事業がある。1993年ヨルダンのバスマ王女来日の際、日本とアラブの働く女性に対する理解と交流を日本政府に求め、始まった。大学女性協会などの団体が支援し続け、今年2月に第23回を迎えフォーラムが開催された。

今年「日本女医会」が世話役で「女性のリーダーシップの達成とその成果」をテーマとして「母の心で医療を」という語録とともに国際女医会のロゴマークになっている。

「輝く月である」との趣旨を述べ、女性の地位が歴史とともに低くなっていったことを説き、女性の自覚めを訴えた。医学の世界においても確かに太古、女性は男性と同じレベルで生き生きと医療に励んでいたことが歴史に刻まれている。ギリシャ神話の医術の神、アスクレピオスの家族がそれをよく証明している。画匠ルーベンスが描いたその娘ヒュギエニアは、「衛生学（Hygiene）」の語源になる

多数ある。昭和30年代までわが国では糖尿病があると危険だから妊娠すべきでないとする風潮があった。しかし私は、糖尿病があっても妊娠・出産ができるという事実を証明して、その学問を樹立した。男性にわからない女性の問題を女性が解決すれば社会は進歩する。糖尿病が発症し、人生喪失感を持っていた女性にとって、妊娠可能であることが分かったことは福音になったと思われる。

リーダーとしての女性医師

さらなる進出に理解を

マとし、日本側のスピーチでは上川陽子・元内閣府男女共同参画担当相が「社会における女性のリーダーシップ達成とその成果」を取り上げ、私が医療における同じ問題を担当した。会議の参加者のみならず、社会全般における女性問題の一つとしてとらえていただくべく寄稿した。

明治44年、平塚雷鳥は雑誌「青鞥」の創刊号に「元始、女性は太陽であった。そして今は太陽の光によって青白く

り「母の心で医療を」という語録とともに国際女医会のロゴマークになっている。中世になり、ドイツ最初の女医ヒルテガルト・フォン・ビンゲンが修道院医学で素晴らしい活躍をする。その後、19世紀まで女性医師はほとんど歴史に出てこないが、1947年、旧チエコスロバキア出身のコリガ女性が初めてノーベル医学生理学賞を受賞した。また糖尿病学に関するノ

から32年後の1932年であるが、女性の主任教授はいまだに12%で増加はみられていない。日本全土の医学系大学では1%前後と報告されている。人材がいらないわけではない。女性がリーダーシップをとれない社会環境があることも事実である。

科学、文芸、スポーツなどあらゆる分野で男女の賃金は異なり、女性が職場で水を得て仕事を全うできた場合、層が厚く豊かになっている例は

いま、リーダーシップどころか「医師不足の原因が女性医師の増加にある」という議論さえあると聞く。妊娠・出産は女性に課せられた天職であり、結婚や妊娠によって仕事停滞しない社会環境が求められる。仕事をする上で同志と認め、家庭では家事を共有することを恥としないという男性側の意識革命が必要である。

一方、リーダーシップをとる自覚と野心が女性に乏しいようにも思える。簡単にあきらめてしまわない女性側の意識革命も望まれる。